



桜工

日本大学工科校友会

1976 VOL23 No.57

会報目次

「巻頭言」会長挨拶	豊永権二	1
日本大学の現況	本部広報課	2
藍綬褒章受章に際しての所感	佐賀直光	3
部会だより 土木	土木工学科	4
建築	建築学科	5
機械	機械工学科	6
電気	電気工学科	7
化学	工業化学科	7
薬学	薬学科	8
物理	物理学科	9
府県支部だより 埼玉県 茨城県 宮城県 千葉県		10
長野県 三重県 石川県 和歌山県		11
広島県 福岡県 大分県 熊本県		12
宮崎県 北海道		13
職域支部だより 国鉄桜友会 東京都建設桜工会 NHKさくら会		14
清水建設桜門会 東急建設東桜会		15
校友会記事 昭和50年度定時総会概要 本会新役員名簿		16
学生に対する後援補助 校友会本部役員名		17
昭和50年度正会員終身会費納入者名簿		18
地方支部名簿		19・20



御挨拶

日本大学工科校友会
会長 豊永権二

私は昭和50年度工科校友会定時総会に於て御推挙により工科校友会々長を御受けいたし

又本学校友会総会に於て理工学部、生産工学部、工学部、医学部、歯学部、農獣医学部、即ち自然科学部門の代表として校友会副会長の御推せんをうけ非才ではございますが御受けいたしました次第でありまして責務の重大であることと日夜痛感いたしております。

いまや現時点に於ける日本大学の卒業生は39万有余名になっております。

その内理工学部出身約9万名、生産工学部出身約1万5千名、工学部出身約1万5千名、即ち全卒業生の3分の1弱を理工系卒業生で占め然も何れも学界、政界、官界、財界の第一線で国内はもとより国際的にもめざましい活躍を続けて国家的、全人類的にも著しい貢献をされております。

特に最近では経済的にも技術的にも総ての問題について国際的視野に立つてものを考へなくてはならない時代になってきました。しかも世界的不況の中で無資源の先進国日本の唯一の活路は我々の努力と革新的技術の開発によるしか他に何もありません。今年も若々しい希望に溢れた新しい卒業生が実社会に巣立って行かれる事でありませう。この1、2年急にきびしさを増してきた就職戦線に当事者は勿論、関係者も一様に胸を痛めていると云うのが現況であります。此の社会情勢にはすべて青年の持つ健康と覇気と英智を集めて立ち向って頂き度いと思えます。過去に於て最近の10年程は高度成長の許でスムーズな就職が出来ましたが、この10年間を除いては現在にも増した困難な時代が何回もあり先輩は夫々に血のにじむ様な努力を重ねて大成し今日に見る理工学部の隆盛につながるものでありまして、吾々も後に続くものとしてこの韌帯をより大きくより強くするために入学せられた新入生を暖かく迎えて学究の徒として純粋に研鑽を積んで彼かなくてはならないと思えます。

希望のあふれる陽春を迎えて、光輝ある母校を讃え、諸先生、先輩諸氏の御尽力に万腔の敬意を表して御挨拶といたします。

日本大学の現況

本部広報課

本学は創立以来87年、すでにわが国最大の総合大学であり、大学院12研究科、大学専攻科をはじめ、法、文理・経済・商・芸術・理工・生産工・工・医・歯・松戸歯・農獣医の12学部と通信教育部、短期大学部9科さらに原子力研究所、司法研究所、総合科学研究所、教育制度研究所、国際研究所など多数の研究機関をもつ。

校友地3.024平方メートル、校舎延面積87万平方メートル。学部科学生数8万余。教職員数7千。社会に活躍する校友は実に40万人を超える。このスケールの大きさと底力のあるヴァイタリティは他大学の追隨を許さない。

大学の運営は鈴木勝総長の理事長兼任によって教学と運営のバランスがとられ、そのもとに副総長には高梨公之教授、新国俊彦教授、小堀進教授。常任理事には柴田勝治理事、沼里運吉理事、佐賀直光理事、川崎勇理事という陣容。さらに副総長の専任と副理事長職制を制度化し、それぞれ高梨副総長、柴田常任理事をあてて、総合大学としての運営の能率速効化をはかった。こうした執行部の陣容強化は、一昨年の石油ショック以来慢性化した経済不況によって顕在化した私学の全般的財政危機を乗り切るために急がなければならないものであった。

昭和50年12月には懸案の学費改定を決定し昭和51年度新入生に対し実施することになった。この学費改定は、単に赤字財政を補填するという意味あいだけからではなく、私学の新しい局面——私学財政の破綻を国庫補助の媒介による私学の画一性と独自の気風の喪失——にいち早く対応するためでもある。そこには国庫補助に過剰な期待をせず、新しい時代に対応する質の高い大学づくりを旨とするとともに87年の歴史と伝統を守りつづけてきた先遣の志をさらに50年、百年先の未来につなげていかなければならないとする鈴木総長をはじめとする大学首脳部の深い認識がある。

こうした教学充実による質的向上は、教育環境の整備充実にもあらわれる。まず医学部臨床教育研究棟、生産工学研究所、工学部中講堂など新築工事の完成。また、現工系習志野キャンパス設置した3,000トン大型構造物試験棟および風洞実験室は、日本の理工学界の発展に寄与するだろうといわれている。

さらに古田奨学金制度を加えて12種の奨学金制度が整備されたことは、創立精神ののちった秀れた人材を育成するうえに貢献するとおもわれる。

こうした着実に整備充実のすすむ教育環境のなかにあつて、学生たちの自治活動も年々活発になって

きている。県人会活動は夏季にそれぞれ郷里で、校友、父兄の協力のもとに地域社会の発展のために地道な活動をつづけている。全学行事としては、秋に統一体育祭と大学祭、とくに大学祭は10月30日から11月下旬にかけて開催され、各学部の特色を生かした展示、映画、音楽、模擬店などが各種サークルの学生たちによってはなやかに行われた。

教育・研究の活力の源泉というべき国際交流も極めて活発である。最近では海外学術交流の一環として、ウィーン大学、クリアセン大学、カリフォルニア大学、ハワイ大学、また西独のシュツトガルト音楽大学、カールスルーエ大学の諸大学の教授をそれぞれ客員教授として招聘した。また教職員、学生の留学制度などによる留学、海外出張者も年々増加している。今年（51年度）の入試状況は、志願者総数14万2千5百余名（3月9日現在）で全国大学中トップの水準数である。おそらく、そこには鈴木総長を中心とする執行部の着実な教学の充実への運営努力とそこから築いた創造的でヴァイタリテイあふれる校友たちの活動に対する適確な社会評価があるとおもわれる。

文責 鈴木信也

藍綬褒章受章に際しての所感



日本大学常任理事

佐賀直光

日本体育協会理事、日本オリンピック委員会常任委員、日本漕艇協会副会長、体育省設置促進委員会委員長現任

私は昨年11月8日付の文部省からのご通達に依り、同11月21日永井文部大臣より栄誉ある藍綬褒章のご傳達を賜りました。

私の生涯を通じての光栄と存じ深い感激にひたひたつ51年の新春を迎えた次第です。

その節は本学理工学部、工科校友会、日本大学端艇部並びに日本体育協会、日本漕艇協会等関係団体の多くの方々より心からなるお祝を賜り、その芳情に対し紙上を拝借し衷心より深謝申上げる次第でございます。此の機会に向後に処する所感を些か申し述べさせて載き皆様のご友情にお応へ致すと共にご理解を賜るならば幸甚至極と思う次第です。

省みますると、去る47年母校日本大学の常任理事をお引受け致す時の私の心境は、残る人生を如何に

意義あらしむる事が出来るかに就いて熟慮熟考の結果、在来から関係のあったスポーツ界に関する事同様、教育事業に情熱を注ぐことは老後のライフワークとして極めて意義深いものと断じ、以来公教育事業とスポーツ事業に一切身を投じつつありこのまま終生を送りたいものと考えております。

振り返って見ると1973年までにGNP大國に成り上った我が國が國の切り上げを余儀なくされ更に2年も経ないうちに変動性による実質的再切り上げに追い込まれましたが、その影響によって土地を初めとする諸々の消費物価の果てに至る迄の値上りは、悪性インフレ傾向さえ示し始めてしまったことは私共の体験したことであり、折も折り中東に於けるイスラエルとアラブ国家群との戦争行動による緊迫した様相、更に引き続いたオイルショックは今日尚も経済的低迷と国際社会に大きな不安要因を絶えず起しつつあります。

私はかつて所得倍増、消費は美德なりとする高度経済成長政策が果して、真の自由主義国家完成への正しい軌道であり理想的なる資本主義経済社会構造を伸長することが出来るかと言うことに大きな疑念を感じ、またその歪現象の生ずることを甚しく恐れていた1人です。戦後我が國は石油による熱エネルギーを最大のエネルギー源として今日の経済大國をあらしめたわけですが、昭和25年の我が國の消費エネルギーの中での石油が占める率は僅々7%でしかなかったものが、47年には74%の膨張しながら大きな成長率をもってふくれ上ったGNP物流経済の強い流れは総てを押し流しつつ結論的には大きな経済不安要素と消費経済の異常な膨張を、且は又多くの重化学公害を生み出し人間疎外感とあらゆる悪平等欲求不満等々多くの人類幼児化的現象を巻き起しつつ、他に何等の具体的熱エネルギー対策の具現を見ることなく今日に及んでいる。本来高度経済成長政策の基本的発想は、自由民主主義思想を骨幹とする調和に満ちた資本主義経済社会を作り上げることであった筈である。それが物質文明先行型の社会構造のみが張り子型に脹れ上り自由民主主義の骨幹になる平和憲法の担い手となるべき国民性の向上民度の高揚等文教施策に対して民族的意識を啓発し、人間的努力を振起する様な政治的に具体性のある努力が尽せなかったばかりか、寧ろそれ等について無関心であったとも言える様な政治的空白が多くの日本人をして人間性喪失型の人種に育て上げてしまった。かえすがえすも残念至極のことです。

私はこの様な現象から来た国民心理の頹廢について慨嘆しておる一人です。

自由、平和、平等、基本的人権等々文化国家的要

◎桜工会誌委員会

委員長 伊藤和雄(化学)	委員 下責木秀吉(土木)	委員 木村吉己(土木)
委員 松井嘉孝(建築)	" 小池昭一(建築)	" 黒瀬元雄(機械)
" 河村陽男(電気)	" 山内盛(薬学)	" 山田翠(化学)
" 平 栄(薬学)		

編集後記

今年もまた花便りをきくころになりました。昨年、中山前委員長から桜工の編集を引きつぎ、名委員長とくらべ、我が非力をしみじみ感じています。しかし委員各位のご努力と、皆様のご協力によって原稿も一部を短縮させていたゞかざるを得なかったほど、集まりました。この桜工が、会員各位の間、大学との間をむすぶ太いパイプになるよう次号もより一層努力したいと存じます。皆様のご援助、ご助言を切にお待ちしています。

(伊藤和雄)

■昭和51年3月30日発行 ■編集兼発行者 / 伊藤和雄 ■発行 / 日本大学工科校友会 (東京都千代田区神田駿河台1-8 / 電話東京293-3251内線206 / 振替・東京3-162710) ■印刷 / 光星印刷株式会社
